

海外の旅で臨場感を悟れ!

近藤節夫

(1938年生まれ・東京都)

エッセイスト

今や海外旅行は誰でも気軽に出かけられる便利な時代になった。古来日本にも「可愛い子には旅をさせよ」という諺があるくらい、旅は人を心身ともに育ててくれるものと信じられている。

見知らぬ土地への旅は、少なからず障害があり、それを乗り越えれば、一皮も二皮もむけて逞しく成長する。その点では海外旅行は国内よりハードルは高い。

しかし、難題や壁の少ない海外、および平和な国より、いさかや争いの多い治安不安定な国への旅は、思いがけないトラブルに遭遇する。それらを乗り越えたとき、より逞しい人間に成長する。

訪れた都市を表面的に見ただけではその実態は容易に分かるものではない。住民と住環境、そして彼らの感受性が互いに刺激し合って人間は成長するものであ

へ入国した経験もある。それら多種多様な経験を通して得た現場の臨場感によって、現地の現実を少なからず理解できるようになった。身体で体験して得た直観、臨場感がシグナルとなり脳が働いてくれたからである。臨場感の感得には、可能な限り少数の仲間と、できればひとりで行ける方が、苦労は多いが、得るものは大きい。

危険信号や異常事態を知らせてくれる最高のシグナルとなったのは、ニューヨーク9・11テロの1年半前にアフガニスタンとの国境カイババル峠近くのパキスタン領内の集落で目の前に見た、銃兵器取引の現場から、あのテロ事件を漠然としながらも予知したことである。

今世界的な話題となったイスラエル軍による熾烈な空爆に対して世界中から非難が浴びせられているが、現地を訪れ、ユダヤ人が日ごろ考えていることを彼らから直に聞けば、彼らの気持ちを少しは理解できる。

アラブ諸国へは度々訪れていたが、十

る。そこへ入り込み臨場感を感得するためには、自らがおおよその計画を立て、飛び込んだら現地の環境と条件に合わせて旅を創ることが大切である。そのうえで体当たりの五感を通して臨場感を感得するには本物を知ったことにはならない。

現地・現場を知ることとは、土地の人々の中で彼らと触れ合うなり、生活をともにして、体臭を感じながら互いの考えを述べ、それを分かち合って智を得ることである。

私自身ある程度臨場感を身に付けるまでは、失敗や数多くの厳しい体験を重ねてきた。強盗に襲われたり、戦地で兵士から恫喝されたり、軍隊や警察に身柄拘束されたり、入国管理で無効とされたビザを、粘って空港で再取得して独立国

余年前陸路ヨルダンからイスラエルとパレスチナ自治区へ入国した。地図を見れば分かるように国の周囲をアラブの国々に囲まれ、息がつまるように暮らしているユダヤ人たちは、いつアラブ人が襲って来るか平素から怯えながら常に警戒を怠らなかつた。その怯えた感情が、今のイスラエル軍のパレスチナ・ガザ地区やペイルストンなどアラブへの攻撃と重なるのである。その是非は別にして、この本質は実際に現場に行かなければ分からないものである。

海外へ旅をする以上、極力旅先で臨場感を身に付けて行動し、ありのままの現実を己の身体で感覚的に知って欲しいものである。

